

主体的・対話的で深い学びを促す模擬国連を取り入れた授業

土屋 進一

1. はじめに

2020年度の入試改革を背景に、大学入試は知識だけではなく、「思考力・判断力・表現力」を重視した入試へ変化していくとされている。また、「学力の3要素」（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」）を各大学の個別試験で問うことも議論されている。しかし、教育現場においては、学力の3要素について、具体的にどのような内容を、いかなる方法で、授業の中に落とし込んでいけばよいか、頭を悩ませている教員も多いのではないだろうか。

本稿では、模擬国連を授業の中に導入することで、学力の3要素を高める具体的な指導例を提示したい。

2. 模擬国連とは

模擬国連とは、「参加者一人一人が国連に派遣された一国の大使となり、一つの国際問題について国益を背負った各国大使の立場から議論をする事によって、国際問題の多角的視点からの理解やその複雑さを理解するとともに、交渉力や論理的思考力、英語力の向上を目的とするサークル活動」（日本模擬国連(JMUN)ホームページより)としている。全国の中学・高等学校の英語部や模擬国連部などが、全国中高教育模擬国連研究会(全模研)などの団体に所属し、年に数回の大会(会議)への参加を通じて、各学校が他の学校の生徒と交流を深め、活動している。その他、模擬国連の具体的な手順やルールなどに関しては、関(2017)に詳細に記載されているので、ぜひ参照されたい。

3. 導入に至る経緯

筆者の勤務校は、普通科とともに理数科と英語科の2つの専門学科を擁している。理数科は、先端科学講座(ロボット講習)やサイエンス・イマージョンなど専門的な特色を活かした理数教育を行っている

のに対し、英語科は、英語の授業数が多いことやネイティブの教員が関わる授業が多いことくらいの特徴しか打ち出せていないのが現状であった。「既存の英語授業のその先にあるものとは何か?」という問いに対し、他教科の教員も含めて議論を重ね、英語「を」学ぶだけではなく、英語「で」学ぶことが可能なものとして、模擬国連の導入が提案として挙げられた。そして、教員自身が模擬国連の研修会に参加し、実際に体験することで、英語科2年次の専門科目である「異文化理解」の授業の中に落とし込み、より魅力的で実践的な内容にしたいと考え、導入を検討した。さらに、導入にあたっては、部活動として行っている他校の模擬国連の活動を見学し、顧問の先生方から、さまざまな助言をいただくことで約10ヶ月の準備期間を経て何とか導入に漕ぎ着けた。

4. 「異文化理解」の授業で土台作り

異文化理解の授業では、例年、『This is Culture』(南雲堂)をテキストとして用い、StereotypingやNonverbal Communication, Genderなどの異文化における価値観や行動様式の多様性を学ぶ授業を行っている。このような知識は、模擬国連を導入するにあたって極めて重要な知識である。しかし、世界の国々の諸問題を考察する上で異文化に対する見方や考え方をより主体的で実践的な学びになるような工夫が必要であると考え、異文化理解の授業が模擬国連を成功へと導くための土台作りとなるよう、次の2点の活動を柱として行った。

- ①異文化間コミュニケーションに関するタスクをペアまたはグループで行い、各自の価値観の選択、意見の構築をした上で発信力の向上を目指す。
- ②異文化間コミュニケーションの理論と実際に起きた事象を自分のことに落とし込んで考えるため、各章の終わりにテーマに沿ったトピックを設定し、

ディベートを同一テーマで賛成と反対の両方の立場で行う。

この上記2点により、異文化理解に対する知識をさらに深め、模擬国連を円滑に進める上での土台とした。

5. 「主体的で深い学び」を促すリサーチ

模擬国連の普及活動を行っている中川慶氏にアドバイザーとしてご協力いただき、模擬国連会議実施の約3週間前に会議資料(「参加の手引き」、政策形成用紙(ポリシーペーパー)、ポジションペーパー(議題に対する自国の立場や政策、およびそれらを支える論理を述べたもの))を送っていただいた。これらの資料をもとに授業の中で準備を行うことになるが、その前に生徒の英語力を勘案し、生徒の担当国を決定した。

異なる言語、文化、宗教などを背景にさまざまな意見を持った人々とコミュニケーションをはかる上で担当する国のリサーチを行うのはまず不可欠である。これまであまり興味や関心のなかった国でも、いざ担当国となり、その国の情報を調べていくと、生徒は徐々にその国について興味を持ち始め、自然と「主体的で深い学び」へと発展していく。例えば、高校2年1学期に実施した国連カフェのメニューの決定(Deciding the menu of the United Nations Café)の「模擬国連会議 参加の手引き」と「政策形成用紙(ポリシーペーパー)」は、次の通りである。

会議設定

「国際連合広報センター(UNIC)では、食文化を通して、国際間の相互理解を深め、国連職員や来訪者がくつろげることを目的に、国際連合本部(ニューヨーク)の施設内に「国連カフェ」の設立を提案しました。しかし、これまで、国連カフェのメニューをめぐる議論が交わされましたが、各国の溝は埋められず、結論が先送りされました。国連カフェ開店を1ヶ月と控える中で、メニューの決定が急務であります。今会議において、各国が協調してメニューを決定してもらえよう、各国の大使にお願い申し上げます」

国連広報センター事務局

(「模擬国連会議 参加の手引き」より抜粋)

1. 今会議において、自国の主要作物を使用して、どのようなドリンクメニューを提案しますか?(箇条書き可)

ポイント 多くの人が賛同できるメニュー、他国の製品を使用した共同メニューなども考えてみてください。

2. 今会議において、自国の主要作物を使用して、どのようなフードメニューを提案しますか?(箇条書き可)

ポイント 多くの人が賛同できるメニュー、他国の製品を使用した共同メニューなども考えてみてください。

3. 自国にとって、不利になるドリンク・フードメニューがあれば、お書きください。

(特になければ、記載不要)

例1: 宗教の関係で、〇〇は食べることができないため、反対する。

例2: 自国が〇〇のメニューを提案する上で、他国が××を提案すれば、自国の〇〇のメニューが提案しにくくなるので、他国の××に反対する。など

4. 会議冒頭で、担当国のメニュー案について、全体に発表しますので、どのように発表するかを考えてください。

※発表時間は1国30秒~40秒程度のため、簡潔な内容で構いません。

※発表は英語になりますので、「I/We/(国名) would like to propose (メニュー案) as a drink/food menu because ~」の形式でお願い致します。

※発表は、①ドリンクメニュー→②フードメニューの順にお願い致します。

(政策形成用紙(ポリシーペーパー)より抜粋)

このような「模擬国連会議 参加の手引き」と「政策形成用紙(ポリシーペーパー)」に基づき、生徒は、各自、担当国の大使になりきり、情報を集め、会議当日までに英語による会議冒頭のプレゼンテーション原稿を作成する。さらに、各国との交渉のシミュレーションや会議全体の進め方までを想定し、準備を進めていく。

6. 「思考力・判断力・表現力」を高める準備時間

模擬国連会議当日までの授業内での準備手順は以下の通りである。

1 時間目

- (1) 担当国の割り振りを発表
- (2) 政策形成用紙(ポリシーペーパー)と参加の手引きを配付
- (3) 模擬国連の流れを理解
- (4) 担当国の情報収集①(地理・気候・人種・宗教など)

2 時間目

- (1) 担当国の情報収集②(特産物など)
- (2) メニューの考案①(自国の主要作物を使用したドリンクメニュー)

3 時間目

- (1) メニューの考案②(他国の製品を使用した共同メニューなど)
- (2) 自国にとって、不利になるドリンク・フードメニュー(※追加資料を配付)
- (3) 会議冒頭の英語スピーチ作成①

4 時間目

- (1) 会議冒頭の英語スピーチ作成②(ネイティブチェック)&スピーチ練習
- (2) 会議戦略
 - ① 全体交渉(どのように会議を進めれば効率的か)
 - ② 自由交渉(どこの国とどのような交渉を行うか)

上記のように、1時間目と2時間目は、主にリサーチに時間を費やし、3時間目と4時間目で目的に向かって論理的に道筋を考え、さらに、他国との交渉も視野に入れて多角的に考えるプロセスを踏むことになる。それは、物事を俯瞰的に捉える思考力を鍛えることにもなり、また、各国のさまざまな要因を考慮に入れて判断し、会議冒頭のプレゼンテーションで思考・判断したものを表現する。これは、まさに「思考力・判断力・表現力」につながる活動と言える。

7. 「対話的で深い学び」を促す会議当日

模擬国連会議当日は、土曜日の午前中を使い、教務部に授業変更を依頼して1～4時限連続の特別授業で実施した(写真1、写真2)。会議の流れは次の通りである。

- (1) 公式討議(スピーチ)
- (2) 交渉(全体交渉、交渉、自由交渉)
- (3) 決議案(DR: Draft Resolution)の作成



写真1 模擬国連会議当日の様子(全体交渉)



写真2 模擬国連会議当日の様子(自由交渉)

決議案は、投票により、賛成多数であれば採択される。決議案(DR)の作成は、英文で「前文」に背景や理由、「主文」に主張を記載する。決議案(DR)の作成が完了すると、議長の手紙で会議は終了となる。

模擬国連への参加は、英語を媒介とし、リサーチに必要な英文読解力(Reading)、プレゼンテーション能力(Writing & Speaking)、各国のプレゼンテーションへの理解力(Listening)の英語の4技能を最大限に活用することも求められ、英語を手段として使用する場面が整っていることも実施の利点として挙げることができよう。さらに、交渉を通じてより良い解決策を模索することになり、このことは、まさに、「対話的で深い学び」を具現化しており、合意形成能力や問題解決能力などの課題に対する総合的な処理能力も同時に高めることにつながる。

会議終了後、10分程度で、振り返りも行った。生徒の感想から、模擬国連会議に対する動機付けとなったと思われる主なコメントを以下に挙げておく。

- ・「自国の利益について考えながら、意見を出し合うことが重要だとわかった。」
- ・「他の国の大使になりきることでその国から主観的に他国を見てさまざまなことを学ぶことができた。」
- ・「各国のことを知るきっかけになり、議論することで発言力も鍛えられた。」
- ・「どうしたら各国が納得いくか協調性を学ぶことができた。」

8. おわりに

本稿では、模擬国連を授業に組み入れる際の具体的な実践例について論じてきた。ここでは、模擬国連の準備から会議当日までの生徒の変化を振り返り、本稿のまとめとしたい。模擬国連の主な効用としては、次の3点が挙げられる。

- ①英語学習への動機付け
- ②国際問題への関心の醸成
- ③論理的な発言力、交渉力の涵養

まず、①英語学習への動機付け、②国際問題への関心の醸成によって、リサーチの段階でインプットの質が高まったことは注目に値する。一斉授業のような知識を一方向から伝達するような授業においては、質の高いインプットを与えることが難しいことが多く、その場合、質の高いアウトプットを期待することも難しい。しかし、ひとたび生徒の動機付けや関心が高まれば、質の高いインプットとアウトプットの両方を期待することができ、③論理的な発言力、

交渉力の涵養も付随的に高まっていくことを実感した。また、通常の一斉授業では、積極性がさほど目立たない生徒も模擬国連会議の場においては、積極的に交渉する場面が見られたことも特筆すべきことである。

冒頭でも述べたように、本稿では、「学力の3要素」（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度」）を教育現場にどのように具体的に授業の中に落とし込んでいくかについて論じてきた。模擬国連の取り組みは、準備時間を含め、まさに「学力の3要素」を秀逸に含んだ活動と言えるのではないだろうか。模擬国連という枠組みの中で、今後も、世界が抱えるさまざまな国際問題について議論し、「主体的・対話的で深い学び」を実践しながら、生徒の英語力の伸長とグローバルな視点を持った生徒の育成に取り組んでいきたい。

参考文献

- 梶浦麻子, Gregory Goodmacher (2005). 『This is Culture 理論と実践で学ぶ異文化間コミュニケーション』南雲堂.
- 関孝平(2017). 「中高生&教員のための模擬国連ガイドブック」第1版.
(http://www.maxclassroom.net/resources/Max_MUNGuidebook_20170712.pdf)
- 中川慶「模擬国連会議 参加の手引き, 政策形成用紙(ポリシーペーパー), ポジションペーパー」.
日本模擬国連ホームページ「模擬国連初心者の皆様へ」.
(<http://jmun.org/beginner.html>)

(西武学園文理中学高等学校 教諭)